

「一宮市」には、一宮市博物館・一宮市三岸節子記念美術館・一宮市尾西歴史民俗資料館など先人の残した文化を紹介する施設があります。私たちの「身近な文化」を学んでみませんか？

中野の渡し 木曾川最後の渡し船



木曾川最後となった「中野の渡し」

かつては一宮市内の木曾川には、河田・大野・わたり・北方・宝江・里小牧・玉ノ井・奥町・起・駒塚・加賀野井・西中野の十二の渡船がありました。橋が開通すると、西中野以外の渡船は廃止されていきました。西中野の渡船は、通称「中野の渡し」と言われますが、正式には愛知県営西中野渡船場といいます。今年、五月二十四日に新濃尾大橋が開通することで、中野の渡しもその役割を終えることとなります（運航は二〇二六年三月までの予定）。詳しい記録が残されていませんが、中野の渡しには、江戸時代から続く長い歴史があります。

江戸時代から続く渡船「中野の渡し」

戦国時代の天正十四年（一五八六）の木曾川の大洪水により、尾張国中島郡中野村を木曾川が貫いたため、中野村が二つに分かれ、対岸は向中野・渡中野と呼ばれました。中島郡には同名の村があるため、西中野村とも呼ばれました。渡船は中野村が分断された頃から始まったとも考えられますが、詳細は不明です。江戸時代後期、天保十二年（一八四一）の村絵図（図）には、「木曾川渡船 壱ヶ所 但自分渡 同川巾 四百廿間（約七六四m）」、「古境 多良海道 巾九尺（約三m）」とあり、木曾川には渡船の絵が描かれています。多良は、養老山地を越えた現在の岐阜県大垣市上石津町にあります。多良の領主は交代寄合（大名に準じる家格）の高木家で、江戸への参勤交代で多良街道（東は市川房枝記念広場で美濃路に接続）を通行し、その



▲図 中島郡中野庄中野村絵図面（部分）（愛知県図書館蔵）
天保12年（1841）

一部であった「中野の渡し」を利用しました。そのほか、『尾張名所図会』には美濃の八神や駒塚等へ向かう際に利用されたとあります。

「中野の渡し」の利用目的と現在

かつては、通勤・行商・帰省・買物などの生活手段のほか、おちよぼさん（千代保稲荷神社）への参詣、時には刑事や花嫁も乗船しました。



▲第59回伊勢神宮式年遷宮（最後の御神木流送）
昭和16年（1941）西中野渡船場

ダムや堰がなく舟運が盛んな頃は、筏流し・帆掛け船・ポンポン船・定期船（笠松く起く桑名）、伊勢神宮く神木の川流しなど上下の様々な通行も見られました。

「中野の渡し」が愛知県営になったのは、昭和十二年（一九三七）で、運営にかかる費用は愛知県と岐阜県で折半しています。

昭和三十一年（一九五六）に上流に濃尾大橋が、昭和五十一年（一九七六）に下流に馬飼大橋が開通して、利用客が減少し、現在は観光

目的での利用がほとんどです。定期運航は残りわずかとなってしまいましたが、伊吹山から養老山脈の景色や木曽川の渡り鳥などの自然に接する贅沢な時間を楽しめます。

中野の渡しの乗船方法

船頭さんは、一宮市側の船頭小屋で待機しているの、声をかけて乗船します。羽島市側からは、旗を掲げて迎えを待ちます。乗船は無料です。行き方は、一宮市側は名鉄一宮駅から西中野行（終点下車）の名鉄バスがあり、自家用車は堤防上の船頭小屋周辺に駐車できます。羽島市側はコミュニティバス石田停留所から徒歩十五分、また川側の堤防道路下に駐車場があります。月曜日と木曜日が運休で、ほかにも不定期で運休があり、運航日でも休憩時間がありますので、愛知県一宮建設事務所のウェブサイトでご確認ください。

（一宮市尾西歴史民俗資料館学芸員 神田年浩）



▲岐阜県側から見た新濃尾大橋と西中野渡船場



▲愛知県側の西中野渡船場

▲岐阜県側の西中野渡船場

■参考文献
中山雅麗著『木曽川の渡し船』、『尾西市史 村絵図編』
■お知らせ

一宮市尾西歴史民俗資料館夏季企画展「中野の渡し」
二〇二五年七月十九日～八月三十一日
休館日：月曜日（七月三十一日・八月十一日は開館）
七月二十二日、八月十二日